

2011.11 No. 20

佐賀大学病院ニュース

患者・医師に選ばれる病院を目指して News & View



〒849-8501 佐賀市鍋島五丁目1番1号

TEL 0952-31-6511(代)

病院ホームページ <http://www.hospital.med.saga-u.ac.jp/>

医学部附属病院30周年を迎えて

病院長挨拶



病院長 宮崎 耕治

佐賀大学医学部附属病院は今年10月で開院30周年を迎えました。
一県一医大構想の中で、当時の佐賀市街からやや離れた鍋島三本杉の田んぼの中にぽつんと建設された医大病院も今や周辺は見違えるほどの街並みに発展し、朝夕にはラッシュで渋滞が出来る程の賑わいです。

開院時、13診療科、325床の本院は、医師会の先生方をはじめ県民のご支持を頂き、今や28診療科、604床となつて、年間の手術症例数は5500症例にものぼり、診療総稼働額は156億円となりました。

これまでご指導ご支援頂きました文部科学省、佐賀県はじめ自治体の皆様、そして医師会や近隣大学病院の方々に厚く御礼申し上げますとともに、30年間の発展に寄与された先輩諸氏にも敬意を表したいと思います。

さて、30年を経た病院施設は今後の高度医療を展開するためには狭隘化しており、老朽化も進んでいることから、現在、再整備計画を進めています。基本設計がまとまりましたので、

これから実施設計に入り来年には着工予定です。県立病院好生館も法人化となり、平成25年には近くの嘉瀬地区に新築移転します。佐賀大学病院の再整備竣工は平成28年の予定ですが、近い時期ですので、ツインタワーとして役割分担、効率化を図れると考えています。

本年からそのための看護師やメディカルスタッフの人事交流も始めています。

大学病院には教育・研究の他に、超急性期医療、高度医療がいわば「最後の砦」機能として求められています。設立に際して初代古川哲二学長が述べておられるように、「地域医療への貢献と救急医療の整備」を果たすべく、建学の精神を継承しつつ、県民が佐賀県で誇れる医療を受けることができるよう、そして佐賀県唯一の医師養成高等教育機関としての責務を果たすべく、これからも前進してまいりたいと願っています。

今後とも皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

来賓祝辞



聖路加国際病院理事長・名誉院長 佐賀大学医学部顧問 日野原重明

私は、佐賀医科大学を日本におけるユニークな医学教育の場とするように文部省から頼まれて顧問になりました。開学前に、ご就任前の古川学長や木村副学長をマックマスター大やワシントン大・デューク大にご案内して、新しいシステムの教育を佐賀で始めようと思しました。今でも「古川イズム」という言葉が残っているのですが、全人的な偉業がなされるために創造することがゴールであった訳です。

私は、POS (Problem Oriented System) の教育のために何回も講義に伺い、本学とは非常に縁が深い訳です。本院は他の新設医大に比べると非常にユニークな展開をして、病歴管理などはコンピュータを使い問題解決するシステムを日本の大学病院としては最も早く導入しました。私が理事長をしている聖路加国際病院も、メーヨー・クリニックなどが大学を持つよ

うに医科大学を充足したいと準備しており、私は去る10月4日に満100歳を迎えたのですが、なかなか死んではおれません。やらなくてはならないことが山ほどあるわけであり、基礎医学をやる場合にまず臨床をやつて、学問的なことをやるんだけれども、その材料やヒントを臨床から得るような大学でありたいと、私は非常に強く望んでいます。どうかこの佐賀大学病院がユニークな発展展開をして日本の医学教育のリーダーシップを取ることを私はここに希望して、おめでたい今日の祝典に駆け付けたいわけですね。そしてこの大学の先生方も大きなビジョンを広げて、広げた大きな円のビジョンの弧になるアークになって次の時代の人がその円を完成してしまおうという、ロバート・ブラウニングの詩に詠ったようなビジョンを是非もって前進していったらいいと思います。

佐賀大学医学部附属病院 開院30周年記念事業

佐賀大学医学部附属病院は、昭和56年10月に診療業務を開始してから30周年を迎え、このたび10月22日に開院30周年を祝う記念式典、記念講演会および祝賀会を佐賀市内のホテルニューオータニ佐賀で執り行いました。

記念式典および記念講演会には約300名、祝賀会においては約400名の来賓、医療関係者、大学職員の方々に出席いただきました。

記念式典では宮崎耕治病院長から式辞が述べられ、常盤豊文部科学省大臣官房審議官、平子哲夫佐賀県健康福祉本部長、池田秀夫佐賀県医師会会長、日野原重明聖路加国際病院理事長・名誉院長から祝辞を頂戴いたしました。

その後、元内閣官房副長官の古川貞二郎先生による「これからの大学病院のあり方を考える」佐賀大学病院の役割と期待」をテーマに記念講演が行われました。

さらに祝賀会では、佛淵孝夫学長の挨拶に引き続き、上村春甫佐賀市医師会会長、横尾俊彦佐賀県市長会会長から祝辞をいただき、山口雅也元佐賀医科大学学長の発声で乾杯。会場には病院再整備計画基本設計のジオラマが展示され、また歓談中には、本院のこれまでの活動内容等の記録と今後の構想を示すために記念に製作したDVDが放映され、出席者は熱心に見入っていました。最後は杉森甫元佐賀医科大学学長の万歳三唱で大盛況のうちに閉会しました。

今回、記念式典における日野原重明聖路加国際病院理事長・名誉院長の祝辞をまとめたので上記に披露させていただきます。



▲病院再整備計画基本設計のジオラマ



医学部附属病院30周年を迎えて

宮崎 耕治 来賓祝辞

日野原重明

佐賀大学医学部附属病院開院30周年記念事業

ドクターカー運用について

現場から始まる 医療の取り組み

救急医学講座 助教 山下 友子

平成23年4月1日より、佐賀広域消防局と協働しての医師同乗救急車（ドクターカー）の運用が開始されました。佐賀広域消防局の救急車1台が大学構内に常駐し、普段の救急と同様に直近での事故や急病での要請に対応すると共に、心肺停止や大きな事故で重傷・救出困難が予想される症例などに、現場近くの救急車に続いて医師と看護師を乗せた救急車が向かい、救助隊や救急隊と協力しながら治療を開始するというものです（このため、現場に2台の救急車が同時に到着することもあります）。

診察の結果必要であると医師が判断した場合に、気管挿管・点滴・薬剤の投与など、救急隊単独では行えない医療を現場で行っています。10月末までに約150件の出動がありました。

今年4月より佐賀県では初めてのドクターカー出動が開始されました。佐賀広域消防局との連携により、救急車1台が佐賀大学病院に常駐し、要請があれば医師とともに、救命救急センターの看護師が出動します。看護師がドクターカーに同乗することのメリットは、何といても救急外来で初療活動を行う医師、看護師が現場でも同じチームで活動ができることです。看護師の役割として現場の救命処置を阿吽の呼吸でできることはもちろん、不安な患者さんや家族への繊細な声かけや配慮は重要となってきました。

また、患者さんの情報は救急出動後にわかるため、移動中のわずかの時間で現場での対応をシミュレーションしなければなりません。限られた医療器具と短時間で救命活動には、病院内の救急処置の経験はもちろん臨機応変な対応が要求されます。救助活動の現場も様々で、看護師自身の安全確保も必要となります。このようなドクターカーでの医療活動に対応ができるために、日々の技術訓練とともに精神面のケアを行っています。今後も、病院前医療活動について知識技術力を向上させ、救急看護師として1分1秒でもはやく医療活動を始めることにより患者の救命率に貢献していきたいと思えます。

看護師の活動

救命救急センター看護師長 原田由美子

病院へと急ぐ救急車は、狭いうえに非常に揺れます。車内での静脈路確保は日頃の腕の見せ所です。また、救命処置時の心臓マッサージ、気管挿管、薬剤投与など物品も限られており、医師、救急隊、看護師の熟練の技と協働体制が必要になります。



佐賀大学医学部附属病院 連携病院長会議

地域医療連携室長 木村 晋也



連携する地域の医療機関・福祉機関と大学が医学・医療の充実と発展を図り、地域医療の向上に寄与することを目的として、平成23年6月18日に千代田館において、第1回連携病院長会議が開催されました。学外から45名、学内より34名の計79名の参加者によって会議が行われました。

宮崎病院長の挨拶後、本年4月に開設された地域医療支援センターの概要、大学が推進している3つの新たな連携方法（マイカルテ、遠隔診断機能付きPACSに

よる双方向地域連携、Pica Picaリンク）、そして地域連携パスの運用状況について大学側より報告をしました。地域連携の目玉である「どこでもかかりつけ病院プロジェクト」であるPica Picaリンク（総務省地域ICT活用モデル事業）については、病院スタッフによる寸劇を用いた紹介も行われました。

参加者間での活発な質疑応答もあり、連携はより深まったと感じられました。多くの通信手段が発達しましたが、やはり顔を合わせて話し合うことが、お互いをよく知るには不可欠です。このような会議を通して、佐賀県の医療機関・福祉機関が丸となって、より良い医療の提供に努めていきたいと思います。

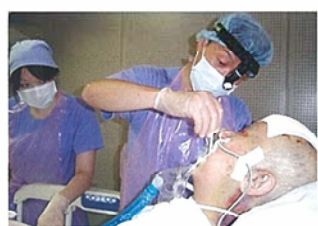
診療科紹介

歯科口腔外科

診療科長 後藤 昌昭

佐賀大学医学部歯科口腔外科は、昭和56年、佐賀大附属病院開院時より佐賀県における唯一の病床を有する歯科として診療を行ってきました。昭和62年には講座となり、教授、准教授、講師と助教2名の教官と、医員4名、研修医5名、大学院生3名、そして技工士1名で構成されています。

病院内における歯科の採算性や、医学部附属病院での歯科卒業研修の負担などの問題はありますが、チーム医療の重要なメンバーとして、歯科口腔外科が必須の診療科であることが認識されるように日々努力しています。



人工呼吸器装着患者さんの口腔管理
人工歯根による咀嚼機能の回復

就任挨拶



国際医療学講座教授 青木 洋介

皆様、日頃よりお世話になっております。

この度、本学医学部医学科国際医療学講座の教授を拝命いたしました青木です。

臨床ではこれまでどおり感染対策と感染症診療の質の維持と向上に努めてまいります。一方、学部教育では医療英語教育プログラムの充実に力を注ぎたいと思えます。いずれの職務も組織横断的 activity ですので、多くの部門の方々にご指導を仰ぐことになると思えます。

また、実効性に富む、医療に役立つ

つ臨床研究を継続するとともに、患者さんのために我が国の感染症医療を牽引して行く後進の育成にも尽力したいと思えます。

私は、日本の医療は世界的レベルにおいて最良の質を維持していると日頃より考えていますので、佐賀大学病院の医療の方向性を更にoptimizeな視点から捉え、医療を通して我が国の発展に寄与する気持ちで今後も精進したいと考えております。皆様方には引き続きご指導を賜りますようお願い申し上げます。

文化コーナー

第4回文化コーナーにもたくさんのご応募をいただき、誠にありがとうございました。

今回掲載されている優秀作品に選ばれた方々には、賞品としてカッチーくんグッズ（マグカップもしくはくい飲み）を贈呈いたします。また、病院ホームページや外来ロビー等に全作品を掲示しておりますので、是非ご覧ください。だんだん肌寒くなってきました。みなさまどうぞご自愛ください。病院広報委員会・文化コーナー担当 南里悠介



「秋の太陽」金嶽 尚さん

俳句（社）日本伝統俳句協会会員「玉藻」同人 木下みね子・万沙羅 選

- 通院に 命たしかむ 秋暑し
 - 受験子の 部屋の秋灯 まだ消えず
 - ささ草の 飛び立つ気配 寺の庭
 - 優しいね 励ましてくれる 虫の声
 - 学祭の 花火の音に 胸おどる
- 川柳（佐賀大学医学部附属病院広報委員会 選）
- 夕食の さんまの塩焼 塩けなし
 - 舞い込んだ こうろぎたちも うつなのか
 - いたみまし 医大に着くや ケロリント
 - お忍びの 2人に出会う くんちかな
- 小林朝子さん
古賀ゆきさん
江口八重子さん
岡本こずえさん
井上由紀さん
- 井上由紀さん
岡本こずえさん
島 道子さん
鍋島の龍馬さん